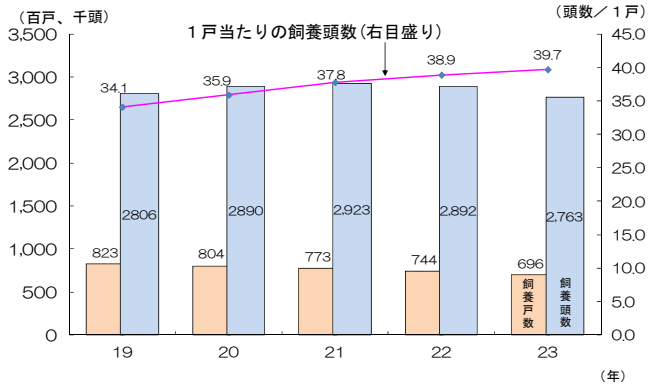
牛　肉

◆飼養動向

23 年 2 月の肉用牛の飼養頭数は、交雑種の減少などにより 276 万頭（▲4.5%）

図 1 肉用牛の飼養戸数および飼養頭数



資料：農林水産省「畜産統計」
注：各年２月１日現在

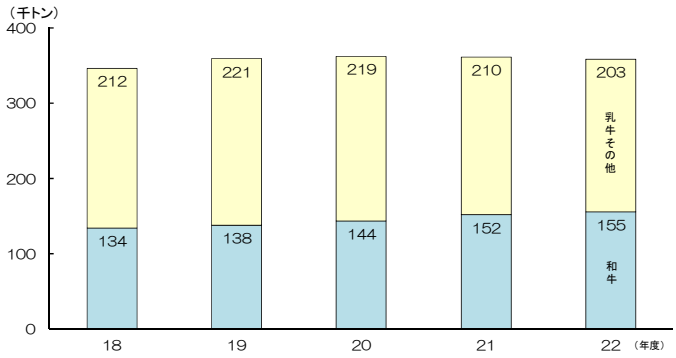
肉用牛の飼養動向を見ると、肉用種は、18 年以降、増加傾向で推移していたが、23 年は宮崎県の口蹄疫発生の影響などにより減少した。交雑種を除く乳用種は 17 年以降、減少傾向で推移し、22 年に 6 年ぶりに増加したものの、23 年に再び減少した。交雑種は、18 年以降増加傾向で推移していたが、23 年は、前年に引き続き、かなり大きく減少した。こうした結果、23 年の肉用牛の総飼養頭数は、2,763 千頭（▲4.5%）と 2 年連続で前年を下回った。

また、飼養戸数は、高齢化による経営中止により、23 年には 69,900 戸（▲6.5%）となった。この結果、1 戸当たりの飼養頭数は 39.7 頭（0.2%）となった（図 1）。

◆生　産

22 年度の生産量は、35 万 8 千トン（▲0.9%）と 2 年連続の減少

図 2 牛肉の生産量



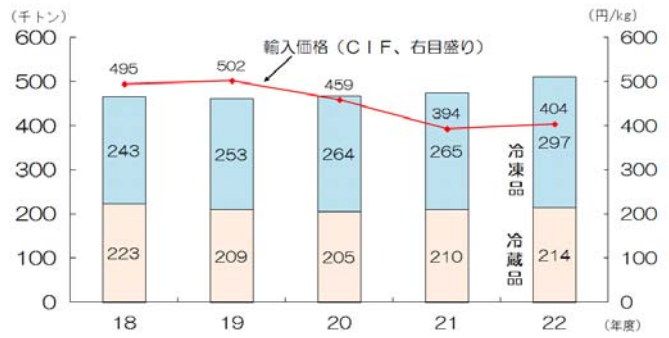
資料：農林水産省「食肉流通統計」
注１：部分肉ベース、注２：乳牛その他には、乳牛の他外国牛等を含む

牛肉の生産量は、2 年連続で減少し 358 千トン（▲0.9%）となった。このうち交雑種は、酪農家において後継搾乳牛を確保するため乳用種との交配が進み、出荷頭数が減少したことから、生産量が減少し、22 年度は、87 千トン（▲11.3%）となった。一方、和牛は 155 千トンと 2.4%の増加となった（図 2）。

◆輸　入

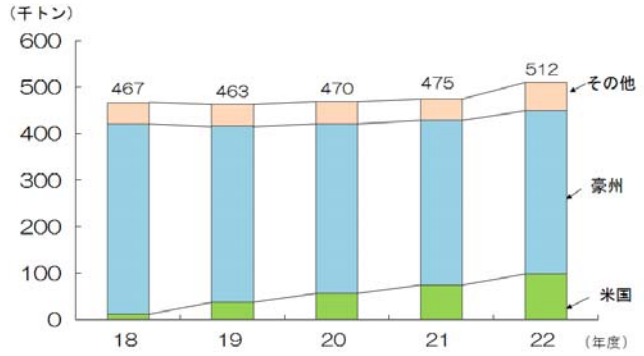
22 年度の輸入量は、前年度をかなりの程度上回る 51 万2千トン(7.6%)

図 3 牛肉の輸入量



資料：財務省「貿易統計」
注１：冷凍品にはくず肉等を含む。
　２：部分肉ベース

図 4 牛肉の国別輸入量



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース

牛肉の輸入量は、18 年度以降はほぼ一貫して増加傾向で推移し、22 年度は米国産の大幅な増加などから 51 万 2 千トン(7.6%)とかなりの程度増加した(図 3)。

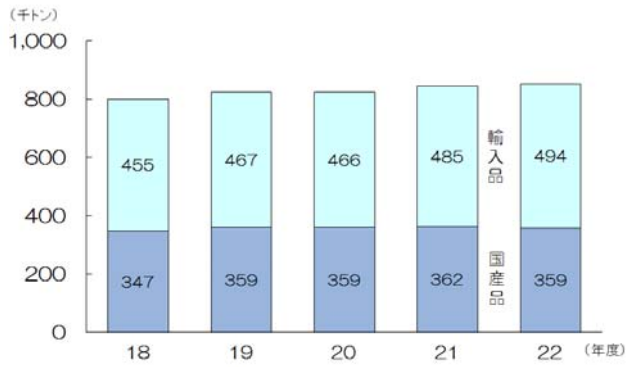
米国産は、BSE の発生による一時停止から再開された後は増加傾向にあり、22 年度は 9 万 9 千トン(33.6%)と前年度を大幅に上回った。輸入牛肉の約 7 割を占める豪州産は 35 万 2 千トン(▲0.9%)と 4 年連続で前年度を下回った。また、豪州産、米国産に次いで多いニュージーランド産については、18 年度以降減少傾向で推移していたが、22 年度は増加に転じ 33,228 トン(23.3%)と、前年度を大幅に上回った。(図 4)。

◆消　費

22 年度の推定出回り量は、輸入品が増加も国産品は減少、合計で 85 万 3 千トン(0.7%)

推定出回り

図 5 牛肉の推定出回り量

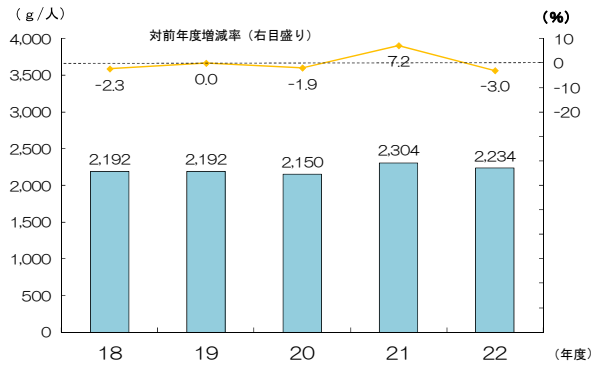


資料：農林水産省「食肉流通統計」,財務省「貿易統計」,農畜産業振興機構調べ
注：部分肉ベース

牛肉の推定出回り量は、19 年度は、米国産牛肉の輸入再開、国内生産量の増加などを背景に増加に転じた。その後、20 年度以降も増加傾向で推移し、22 年度は 85 万 3 千トン(0.7%)と 4 年連続で前年をわずかに上回った(図 5)。

消　費

図 6　牛肉の家計消費量（1 人当たり）



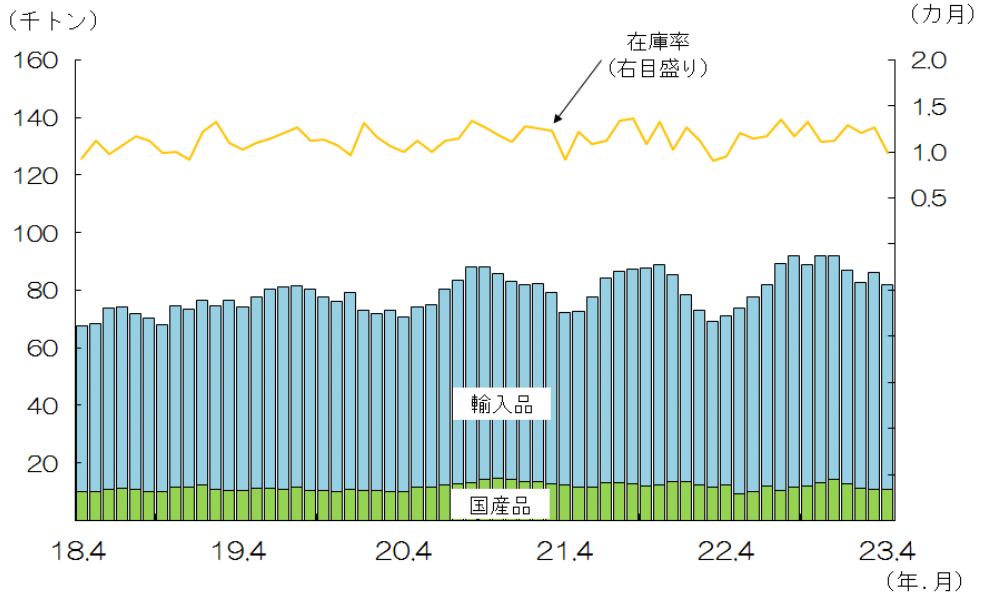
資料：総務省「家計調査報告」

牛肉需要量の 3 割を占める家計消費は、15 年度以降おおむね減少傾向で推移し、20 年度は景気の後退に伴う消費の減退などから、前年をわずかに下回った。しかし、21 年度は、景気の低迷による経済性志向などを反映して小売価格が低下したため、牛肉の値ごろ感が高まり、内食化が進展したことなどにより、1 人当たり 2,304 グラム（7.2%）と前年度をかなりの程度上回った。しかし、22 年度は、前年の反動もあり、同 2,234 グラム（▲3.0%）と再び減少に転じた(図 6)。

◆在　庫

22 年度期末在庫は、国産品はかなりの程度減少、輸入品は大幅増加

図 7　牛肉の推定期末在庫量と在庫率



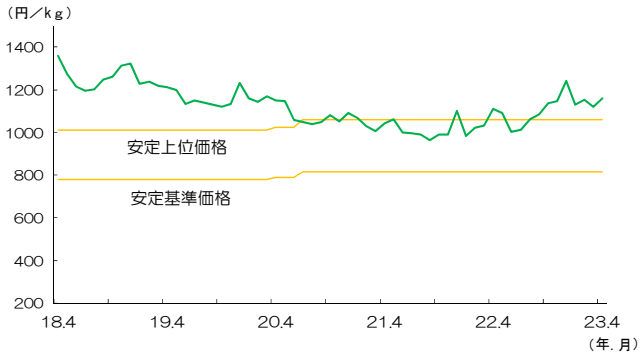
資料：農畜産業振興機構調べ
注１：在庫率＝在庫量／推定出回り量
　２：部分肉ベース

期末在庫量は、17 年度以降は増加傾向で推移し、19 年度にはいったん減少したものの、20 年度は再び増加に転じ 7 万 9 千トン(8.8%)となった。22 年度は、国産品が 1 万 1 千トン（▲6.6%）とかなりの程度減少したものの、輸入品が 7 万 5 千トン（30.7%）と大幅に増加したことから、全体では 8 万 6 千トン（24.4%）と前年度を大幅に上回り、在庫率は約 1.26 カ月となった（図 7）。

◆国産枝肉卸売価格（東京・省令）

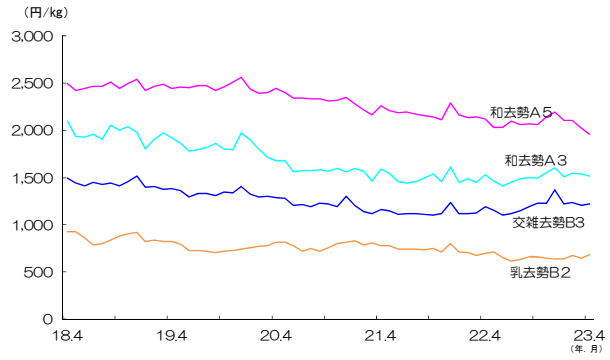
キログラム当たり 1,108 円（9.2%）とかなりの程度前年を上回る

図 8 牛肉の卸売価格（東京・省令価格）



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注１：省令規格は、去勢牛Ｂ２とＢ３の加重平均
２：消費税を含む

図 9 牛肉の卸売価格（東京・種別）



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：消費税を含む

省令規格

牛枝肉卸売価格（東京・省令）は、18 年度以降低下傾向で推移し、21 年度も景気低迷による消費者の経済性志向の高まりから、比較的安価な輸入牛肉や豚肉などに需要がシフトしたことなどにより、キログラム当たり 1,015 円（▲5.1%）と4年連続で前年度を下回った。しかし、22 年度は、交雑種の卸売価格の上昇などにより、同 1,108 円（9.2%）と前年度をかなりの程度上回った（図 8）。

和牛

和牛（去勢）の卸売価格は、15 年度以降は、と畜頭数の減少による生産減の影響もあり堅調に推移していたが、19 年度には下落に転じた。21 年度は、消費低迷などから A5 がキログラム当たり 2,186 円（▲5.7%）、A3 が同 1,500 円（▲5.3%）といずれも低下、22 年度においては、A5 が同 2,087 円（▲4.5%）とやや低下、A3 も同 1,507 円（0.5%）とわずかな増加にとどまった（図 9）。

乳牛

乳牛（乳用種去勢牛）の卸売価格は、19 年度以降前年割れが続き、22 年度は B3 がキログラム当たり 768 円（▲6.8%）、B2 が同 655 円（▲11.7%）と、前年度をかなり下回った。

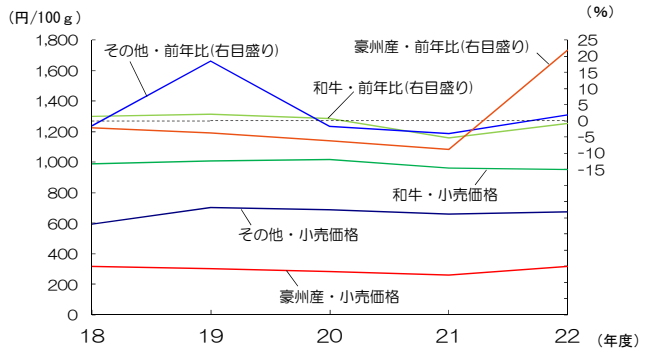
交雑種

交雑種の卸売価格は、と畜頭数の増加により 18 年度以降前年を下回って推移していたが、22 年度は、生産量の減少から交雑種去勢牛 B3 がキログラム当たり 1,198 円（5.7%）と前年度をやや上回り、B2 は同 1,072 円（16.9%）と前年度を大幅に上回った。

◆小売価格

和牛は低下、国産品（交雑種）及び輸入品（豪州産）は上昇

図 10 牛肉の小売価格（サーロイン・特売価格）



資料：農畜産業振興機構調べ
注：消費税は含まない

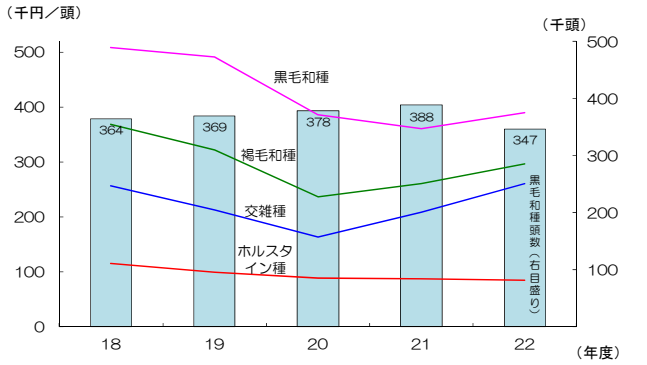
和牛の小売価格（サーロイン、特売価格）は、米国産輸入牛肉の出回り量が減少した 16 年度以降堅調に推移し、20 年度は 100 グラム当たり 1,016 円（0.6%）となった。しかし、21 年度は、消費者の経済性の高まりにより高級部位が敬遠されたことから、14 年以降初めて前年度を下回り、22 年度も同 953 円（▲0.9%）と 2 年連続の値下がりとなった。一方、国産（交雑種）は、生産量の減少から同 673 円（1.8%）と値を上げた。

また、豪州産輸入牛肉は、21 年度に米国産へのシフトや豪ドル高の影響などから、前年をかなりの程度下回ったものの、22 年度は、輸入品（冷蔵）の供給量が減少したことなどから同 318 円（21.8%）と前年度を大幅に上回った（図 10）。

◆肉用子牛

肉用子牛価格は、交雑種は取引頭数の減少などから大幅に上昇

図 11 肉用子牛の市場取引価格と頭数（黒毛和種）



資料：農畜産業振興機構
注：消費税を含む

黒毛和種

黒毛和種の取引価格は、15 年度以降堅調に推移し、18 年度には過去 10 年間で最も高い水準を記録した。しかし、19 年度以降は、枝肉卸売価格の低下などにより下落傾向が続いていた。しかし、22 年度は、取引頭数が宮崎県の口蹄疫の発生の影響などで 34 万 7 千頭（▲10.7%）と前年度をかなりの程度下回ったことから、1 頭当たり 39 万円（8.0%）となった（図 11）。

褐毛和種

褐毛和種の取引価格は、19 年度以降前年度を下回って推移し、20 年度は1頭当たり 23 万7千円（▲26.4%）とBSE 発生時（13 年度）の水準を下回った。しかし、21 年度以降は、上昇に転じ、22 年度は同 29 万 6 千円（13.5%）と前年度をかなり大きく上回った（図 11）。

ホルスタイン種

ホルスタイン種の取引価格は、19 年度以降、枝肉卸売価格の低下などから下落し、22 年度は1頭当たり 8 万 5 千円（▲2.7%）と 4 年連続で前年を下回った（図 11）。

交雑種（F1）

交雑種（F1）の取引価格は、19 年度以降前年を下回って推移し、20 年度は1頭当たり 16 万 3 千円（▲22.7%）と前年を大幅に下回った。しかし、21 年度以降、取引頭数の減少から大幅に上昇し、3 年ぶりに前年を上回った。22 年度も同様の傾向が続いており、同 26 万 1 千円（25.0%）と大幅に上昇した（図 11）。